

やれさよい〜よ——エ」

「オウ——今下りかな」

「下りますぢや、伏見に着いたらナ、萬屋のお母に私が貰入をわすれて置いたで、取つて置いて呉れと言傳をしとくれよ——」

「早う上つといでよ——（歌）いわれ淀の町にもナ——すぎたるも——のはよ——お城櫓となア——水車よ——ヤレサよい〜よ」（ポーン）鐘の音。

船中は皆白川夜船の高齋でグウツと寝入つて居ります、東がジイーと白むと鶏の聲（コココツコウ——）方々の茅屋葺きの屋根からは煙がモウ〜と出て居ります。お百姓の朝夜業、藁を打つてる音がかすかに聞こえてる、（唱）「チワイナレナ、ワラバイ、ワイナアヅキ、サンガデチバラレタン、フハイ」譯の解らん歌を唄ふて居る、お婆さんは糸車を仕て居る（ズウ〜チョコキ）妹娘さんは機を織つてる、姉さんは容子を仕て「おまい紺屋か紺屋の手間か、お手が染まればあいとなる」牧方十五丁手前で一人ポイと上つた男が御座ります。

「ア、〜、大津から附けて来て僅か五十兩の金で骨を折らしよつた。今晚は橋本か中書嶋で久し振りて女良買を仕て明日は芝居か噺へでも行つてやる」

堤を歩いて居りますと土手の下から出て来た犬が盗人と云ふ事を知つて居るか（ウム——ゾク、ウ

ム——ゾク、ドロボウ——）

「何を云やがるね……（唱）阿部の保名の子別れよりも、今朝の別れがなほつらい」

此方では犬の貰ひ泣き（ウムワン、ウムワン）此方では年を取つた犬が附合に泣かぬと思ふて齒が抜けてあるのに（ウムバン、ウムバン、バウ〜）欠伸をまぜて泣いてる、此方では大きい犬と小さい犬と喧嘩を仕てる（ウムワン、ウムワンワンワン〜、ソプル〜〜キャン〜〜）噺られよつたり仕てな、船中では五十兩の金が無くなつたと云ふので、主船頭の勘六が私の船で五十兩の金が無くなつては三十石の名折れになると船をキリツと廻して上りにしました、綱を陸へ投り上げると四人の船頭が土手へ上りまして綱を引きます、段々上つて参りましたが其様事は知りませぬ右の男

「オイ一人乗せてんか」

「オウ上りぢや」

とうまく乗せまして首尾よく賊を捕へました、聞いて見ますと京の大佛前こんにやく屋の權兵衛と申します男で、五十兩の金を取り戻し、是も船頭の頓智で金が戻つたと嬉んで御禮として五兩貰ひました、盗人は苦勞して三文にもならず、船頭が五兩利益ましたので、

權兵衛こんにやく船頭が利

——終り——